

【選評】

東京大学准教授

小川浩之



## 感染症の過酷な現実から 新しい世界を思索する

新型コロナウイルスの感染拡大にと  
もない、感染症やそれらに対処する保  
健事業に関する研究への関心が大きく  
高まっている。これらの研究は、医学

や公衆衛生学などはもちろんだが、  
文社会系の学問においても従来から蓄  
積がある分野である。  
そもそも、長期にわたる人類史や文

### 人類と病

国際政治から見る感染症と健康格差  
託摩佳代・著

中公新書 / 2020年4月 / 820円+税

明の興亡史を扱った書物では、感染症は定番といつてよいテーマである。ジャレド・ダイアモンド『銃・病原菌・鉄』、ウィリアム・H・マクニール『疫病と世界史』などは、日本でも広く読まれてきた。また、帝国史研究でも、感染症は中心的なテーマのひとつとなっている。英語圏では、メーガン・ヴォーン、デイヴィッド・アーノルド、アリソン・バシユフォード、スニル・アムリスなどによる優れた研究があり、日本でも、脇村孝平『飢饉・疫病・植民地統治』、飯島渉『マラリアと帝国』、磯部裕幸『アフリカ眠り病とドイツ植民地主義』などの重厚な研究が刊行されてきた。

### WHOの生い立ちと機能を知る

それに対して、国際政治学では、軍事力を中心とするパワー、経済的利益、文化やアイデンティティなどを中心に

分析が行われる傾向が強く、感染症や公衆衛生は、相対的に周辺的なテーマにとどまってきた。だが、そうした傾向も変わりつつある。

その際に焦点のひとつとなっているのが、国際連盟の保健衛生活動である。本書の著者は、すでに『国際政治のなかの国際保健事業』を著し、後藤春美などとともこの分野で先駆的な業績を重ねてきた研究者である。このたび新書の形でそのエッセンスを紹介してくれるのは、たいへん時宜にかなっている。

本書でも簡潔に論じられているように、国際連盟保健機関から第二次世界大戦後の世界保健機関（WHO）の設立に至る経緯や、その後のWHOの活動の歴史を知ることが、現在、新型コロナウイルスへの対応をめぐりしばしば厳しい批判を浴びる（ただし、BRICS諸国は一致して支持を表明して

いる）WHOの役割や意義、問題点について考えることにつながるだろう。また、本書からは、近年の重症急性呼吸器症候群（SARS）やエボラ出血熱の流行をめぐり、WHOを中心とする既存の国際的な対応の枠組みの問題点が浮かび上がり、さまざまな改革が行われてきた（だが、そうした改革はまだ不十分なものとどまっている）ことも理解することができる。

本書で著者は、ペスト、チフス、マラリア、天然痘、ポリオなど古くから存在する感染症について、主に一九世紀から第二次世界大戦後の冷戦期にかけて、それらに対処し、根絶を目指す国際的な取り組みが行われてきたことを具体的に論じる。さらに、エイズ、SARS、そして現在パンデミック（世界的大流行）となっている新型コロナウイルスなどの新興ウイルス感染症、二〇一四―一五年に西アフリカ諸国で

大流行したエボラ出血熱のような再興ウイルス感染症（既知のウイルスによる感染症が流行するもの）についても、国際的な対策とその限界が論じられている。

本書ではまた、非感染症疾患（特に糖尿病、がん、高血圧症などの生活習慣病）と、それらを引き起こす大きな要因となっている喫煙、塩分・糖分・アルコールの過剰摂取などにも焦点が当てられる（さらに、本書では論じられていないが、糖尿病などの基礎疾患を持つ人や抗がん剤を用いている人は、新型コロナウイルスに感染すると重症化しやすいため、感染症と非感染症疾患の問題は極めて密接に関連するようになっていく）。発展途上国での医薬品へのアクセスの問題や、途上国で大きな被害が出ているにもかかわらず、それに見合った国際的注目を集めていない土壌伝播性蠕虫感染症、オ

ンコセルカ症、トラコーマなど「顧みられない熱帯病」に注意が払われるのも、本書の特長といえよう。

## 戦争と『アナロジ』

著者は、序章の冒頭で、「感染症と人類社会の関わりは長い。紀元前から現在に至るまで様々な感染症が人類社会に打撃を与えてきた。感染症は人類を最も苦しめてきた「病」といつてもよい」と記す（一頁）。そして、現在、新型コロナウイルスも、世界各地で多くの人命を奪い、人々に大きな痛みや悲しみを与えている。

さらに著者は、新型コロナウイルスの感染拡大の中で、あらためて注目される、多くの人に読まれているアルベール・カミュ『ペスト』から、「ペストがわが市民にもたらした最初のものは、つまり追放の状態であった」という一文を引用し、それは「感染症が戦

争と同じく、市民社会を包囲し、極限に追い込みうるものであることを示している」と論じる（七〜八頁）。感染症の大規模な流行は、人々に深い苦しみを与えるのみならず、戦時に匹敵するほどの極限状態を生み出すのである。だが、そうした感染症や戦争にもなう苦しみと極限状態の中にもわずかによい点があるとすれば、それらが人間に対して、自分自身や社会について、あらためて深く考えるように促すことであろう。

カミュ『ペスト』は、一九四七年に発表された作品であり、作家自身が中世ヨーロッパのようなペストの大流行を経験したわけではない。それはむしろ、ナチス・ドイツによる占領下のヨーロッパで起こった出来事の隠喩だと言われる。

それに対して、同じく著者が言及するジョヴァンニ・ボッカッチョ『デカ

メロン』は、作家自身が一三四八年にフィレンツェを襲ったペストの惨状を目の当たりにする中から生み出された作品である。そして、近世イングランドの政治哲学者トマス・ホッブズにとつては、ピューリタン革命にともなう内戦状態を経験するとともに、ヨーロッパ大陸で三〇年戦争の甚大な被害を目撃したことが、『リヴァイアサン』（一六五一年）に結実する彼の思想の重要な背景となった。新型コロナウイルスの感染拡大もまた、それにともなう苦難とロックダウン（封鎖措置）などによる社会や経済の激変を通して、さまざまな思索を生み出すことになるだろう。

国連事務総長グテーレスは、新型コロナウイルスの感染拡大を「第二次世界大戦以来最大の危機」と訴え、アメリカで急速に感染が広がる中で、トランプは自らを「戦時大統領」と名乗っ

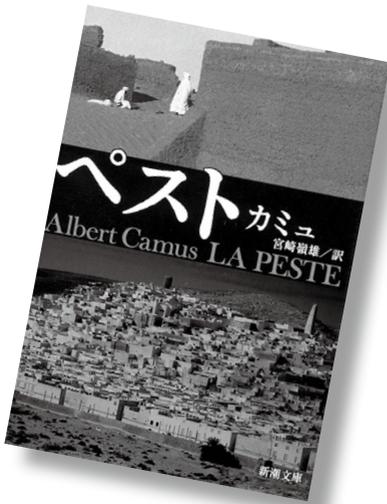
た。だが、感染症を戦争に類似した側面を持つと捉えるならば、冷戦後だけでも枚挙にいとまがないほどの紛争や内戦を通して人々が経験した苦難の方が、少なくともこれまでのところ、新型コロナウイルスの影響よりも、はるかに深刻だと考えることもできるだろう。「コロナ後」の世界がどのようなものになるかについても、さまざまな議論はなされているが、私たちが未来を予測する力には常に限界がある。

ただし、手掛かりはあるだろう。例えば、高坂正堯は、冷戦終結から数年が経過した一九九四年に行われたNHKでの講義とそのテキストをもとに書かれた著書『平和と危機の構造』で、次のように論じた。「戦争後の、あるいは抗争の後の状況は、戦争や抗争が終わり、それ以前の状況に戻るというものではないのです。……それに抗争は歴史の歩みを加速させるものです。

抗争の必要から、それまでの常識が無視され、破られ、新しいものが出現してきます。抗争という試練に耐え得ない制度がつぶれ、その必要が新しいものを生み出すと言ってもよいでしょう」(二一〜二二頁)。

『人類と病』もまた、さまざまな感染

症や非感染症疾患と、それらに対する国際的な取り組みの成果と限界について広い視野から論じた書物として、私たちが新型コロナウイルスのパンデミックについて理解を深め、その後の世界のあり方について考えるための多くの示唆を与えてくれるといえる。●



## ペスト

カミュ・著／宮崎嶺雄・訳

新潮文庫／1969年11月／750円＋税